

## 「絶句」の会話分析

平本 毅<sup>i</sup>

本稿では認知的事象の「社会」性を例証する現象のひとつとして、驚きのあまり「絶句」という状態の公的な理解可能性の組み立て方を会話分析により明らかにする。日常会話の録音・録画データの分析から、人が「絶句」しているという事態の理解可能性が、次の順番で振る舞いを配置することにより生み出されていることが明らかになる。A)ある情報に驚きすぎて言葉がでない場合：①語り手による、情報価値を釣り上げられたニュースの告知 ②ある程度の長さの沈黙 ③聞き手による、強調された、驚きを示す反応のトークンの産出。B)ある情報にいったん言語的手段で驚いた後、驚きすぎて言葉が継げない場合：(1)語り手による、情報価値が釣り上げられたニュースの告知 (2)聞き手による、強調された、驚きを示す反応のトークンの産出 (3)ある程度の長さの沈黙 (4)聞き手による、驚きを示す反応のトークンの産出。さらに、やり取りに視覚的資源が使えるかどうか（電話会話か対面会話か）が、A)とB)の組み立てに影響を及ぼすことも明らかになった。

キーワード：会話分析，行為記述，絶句，認知の「社会」性

### はじめに

人の認知が社会的であるとはどういうことか。退官された門田幸太郎先生のゼミで、社会心理学を一から教えていただきながら筆者が考え続けたのはこのことだった。学部生時代に学んだ社会学でいうところの「社会」と、認知が社会的であると言う際の「社会」との関係は何か。認知の社会性に迫ることができるとすれば、その方法論としては何が妥当か。こうしたことを考えながら、社会的認知の本を読んで認知心理学や情報処理アプローチを学んだことや、分散認知や状況的認知の議論にも手を広げたことを覚えている。

けっきょく筆者は、認知的事象の表出を含めた具体的な振る舞いを人びとが互いに示し合っていく、相互行為の具体的な有り様を研究主題に定め、様々な場面の相互行為を録画・録音した素材を使って会話分析を行うようになる。本稿で行いたいことは、会話分析を経由したい今の時点で、認知の「社会」性について言えそうなことを、経験的な分析を通じて描写することである<sup>1)</sup>。具体的には、「驚きのあまり絶句する」という認知事象が、他者にとってもそう理解可能な（=社会的な）行為の形で組み立てられうるものであることを、日常会話の分析から示す。

i 京都大学経営管理研究センター特定助教

## 1. 人間行為の理解可能性の形式的分析

人間行為をどう理解するかは、社会学が取り組むべき課題であり続けてきた。というのも、社会生活の秩序は社会成員による行為の相互理解の上に成立するものだからである。誰かが質問してきたから答えた、挨拶してきたから挨拶し返した、といった相互理解があるからこそ、人と人とのやり取りは意味のある、秩序立ったものになる。過去様々な種類の行為理論や調査プログラムが、この課題に取り組んできた。本稿で依拠する会話分析はこの問題について、研究者が人間行為を観察し、その意味を解釈して言語を用いて記述する前に、相互行為の場に参与する者自身によって、行為が言語を用いてすでに記述され、その記述の下に理解されている (c.f. Sacks, 1963=2013) という事実に着目する。このため会話分析は、自然に生じた相互行為のデータを使い、これを独自の記号 (Jefferson, 2004)<sup>2)</sup> を使って詳細に書き起こしたうえで、ある振る舞い (発話や身振り等々) がどんな行為を行っているものとして公的に理解可能かを、その振る舞いに対する日常生活者の理解を資源に分析する。

人間行為を経験的に調べるには、まず観察を行わなければならない。Schegloff (1996; 163) がまとめているように、文化人類学者が行ってきたことの一つは、言語体系も生活の仕方も異なる文化に調査者が入り込んで観察を行い、ネイティブの人々が何を行っているかを理解しようと努めることだった。他方で、調査者自身が属する文化の社会生活を調べる時には、この問題は生じない。被調査者が何を行っているか、たいていの場合問題なく理解することができるからである。Schegloff はここに、従来の人間行為にかんする研究の落とし穴を見出している。すなわち、被調査者が何を行っているかたちどころに理解できてしまう「透明性」(Schegloff, 1996; 164) のゆえに、自文化における人間行為の理解可能性は軽視され、分析の組に乗ることがなかった (Schegloff, 1996; 163-164)。もちろん、日常生活における相互行為の成り立ちがまったく取り上げられなかったわけではない。たとえば Erving Goffman は、街角の出来事やカードゲームなどの日常生活の詳細な観察を行った。だが彼もまた人間行為の「透明性」に阻まれ、自己呈示を行う (Goffman, 1959) とか面子を維持する (Goffman, 1955) とかいった、「非公式的な」一人間行為の表面的で公式的な側面の裏側にある、「透明」でない一行為を見通そうとする一方で、「透明」な行為の理解可能性を重視しなかった (Schegloff, 1996; 165)。

自文化の社会成員が行う行為の理解可能性は、社会学や人類学ではなく言語哲学の文脈で、言語行為論 (Austin, 1962=1978) の名の下に研究されてきた。ふつう言語行為論では調査データを使わず、作例を使ってその形式的特徴 (典型的には統語的特徴) から人間行為の理解可能性を導き出す。言語行為論で作例が使われるのも、自文化の人間行為の「透明性」によるものであろう。ある発話がどんな行為を遂行するか常識的に理解できるからこそ、作例による説明が通用する。作例の分析が抱える問題の一つは、人間行為のカテゴリーを研究者の側が定めるしかないことである。言語行為論は質問、依頼、宣言といった行為の理解可能性を問題にしてきたが、実際の人間行為の種類は、こうした単純なカテゴリーに収まりきれない可能性がある。

以上の問題は、調査の実施にかかわる問題である。言語行為論は自文化の行為の理解可能性の「透明性」のゆえに調査データを使う必要性を見いださず、作例を使ったために実際の人間行為の多様性を捉えることができなかった。他方で文化人類学においては、他文化の社会生活における行為が (調査者にとって) 「不透明」であるために観察を基礎としたフィールドワークが実施される。Goffman は文化人類学者のような観察を自文化に対しても行い、単純なカテゴリーに収まらない人間行為の多様性を射程に収めた。だが彼はネイティ

ブとして「わかってしまう」(彼が「公式的」と呼んだ)行為の理解可能性に価値を認めず、より微妙なニュアンスを伴う、彼が「非公式的」と呼んだ行為のあり方を描き出そうとした。観察手法は、ある行為が本当にその場の人々にとってその行為を行っているものとして理解されうるものであるかを、形式的な仕方では明らかにできない。Goffmanがそうであるように、優れた観察者は人間行為の諸側面を詳細に検討し、それに記述を与えることができる。だが、人々が行っていることは本当に自己を呈示することや面子を維持することであり、それを受けた他者もそのように理解するのか(平本, 2015)。すでに論じたように、その場にいる人々自身の理解可能性を調べることは、社会生活の秩序だった性質を調べるうえで決定的な意味をもつ。これを明らかにすることは、人々の志向に根差した形で人間行為の理解可能性を記述していくことにはほかならない。そして、人々の志向に根差した形で人間行為の理解可能性を記述するためには、その場面の一度きりの観察ではなく、録画・録音データを、その詳細(沈黙の秒数、重複の開始時点と終了時点、音の伸長などの振る舞いの形式上の性質)に気を配りながら繰り返し検討する必要がある。これを行うのが会話分析である。会話分析は、相互行為の細部を繰り返し検討可能な録画・録音データを使うことによって、一見しただけではたんに「透明」なだけの「わかってしまう」行為の理解可能性が、じつは緻密な仕方では方法的に組み立てられているものであることを明らかにする。この方針に従うとき、行為のカテゴリーを研究者の側で定める必要はなくなる。会話分析は、単純な質問や依頼等々だけでなく、相手側に属する情報のうち自分が知っている分だけを伝えることによって相手の語りを釣り出す(Pomerantz, 1980)、すでにほのめかしておいたことに確認を与える(Schegloff, 1996)等々の、「まだ記述されていない」(Schegloff, 1996)行為の理解可能性を形式的に例証してきた。

「形式的に」行為の理解可能性を調べるといえるのは、次のような意味である。行為を他者に理解可能なように構成するやり方がもしランダムなものであったなら、行為の相互理解の秩序だった性質は生じようがない。したがって行為の理解可能性の構成には、社会成員が共有し、繰り返し利用することができる「組み立て」が使われていると考えることができる。このため会話分析は、繰り返し利用可能な行為の「組み立て」を、当該の振る舞いの「構成 composition」と「位置 position」の二つの側面を検討することによって見つけ出そうとする。人はこの「組み立て」を、実際に使うことを通じてすでに「知っている」が、会話分析は相互行為の詳細な調査により、この「組み立て」を可視化し、自分たちが行っていることを参加者が振り返ることができるようにする。分析が「形式的」であるというとき、繰り返し利用可能な「組み立て」を、振る舞いの「位置」と「構成」を考慮しながら、データの中の参加者自身が実際に使っていることが確かめられる仕方で明らかにしていくという意味が込められている。

以上をふまえたうえで、本稿では認知の「社会」性の形式的分析の一例として、「驚く」という行為の理解可能性を取り上げる。もちろん日常生活者は他者の認知処理過程を共有できないだろう。しかしながら他者が「驚いて」いることは、しばしば容易に観察可能である。また他者を「驚かす」ことも、ふつう困難ではない。日常生活者は、適切な場面で適切な仕方で誰かを「驚かせ」、自分も「驚く」ことを秩序立って行うことができる。この限りにおいて、「驚く」ことが個人の認知過程に閉じた事柄であって、社会学ではその過程を扱うことができないと論じることに意味はない。加えて「驚く」という行為は公的に観察可能なだけでなく、その「驚き」方の微細な区別さえ、もし参加者がその区別に志向しているとするなら、記述し分けることができるものである。本稿では「驚き」の中でも、とくに驚きの大きさから言葉が出ない状態(「絶句」)が参加者によって区別されて捉えられており、「絶句」という行為が特定の「組み立て」を通じて理解可能になっていることを例証する。またこれに際しデータとして対面会話と電話会話の二つを使用し、この二つがそ

の場の人々によって場面として区別されているかどうかを、「絶句」という行為の理解可能性の組み立てにそのことが反映されているかどうかを調べることにより議論する。

## 2. 「絶句」の記述可能性

まず次の断片をみてみよう。

### 【断片1 電話会話】

09 →(0.7)

この括弧内の0.7という値は、0.7秒の無音状態を表す。つまり本稿では、この0.7秒の無音状態が何を行っていかを調べたい。先に結論を述べておくと、この沈黙は「絶句」という行為を行っているものとして記述可能なものである。

じつは「絶句」の分析には、先例がある。Wilkinson & Kitinger (2006: 165-168 以下略称としてWKを用いる)は英国と米国の電話会話のデータから、沈黙をもって驚きを示す行為の組み立て方を、簡潔に記述した。本稿では彼女らの研究の知見を参照しながら分析を進める。会話分析的には、本稿の分析によりWKに付け加えられる知見は次の二点にまとめられよう。第一に、WKの研究の焦点は「o::h!」や「wow」といった「驚きを示す反応のトークン（言語的指標）」の利用により「驚き」が相互行為の中でいかに達成されるかにあり、行為としての「絶句」自体の記述が目的だったわけではない。そのため記述はごく簡潔であり、「絶句」の理解可能性を生み出す組み立ての、データコレクションに基づいた体系的な分析は行われていなかった。分析部分で詳述することになるが、本稿では「絶句」の理解可能性を生み出す組み立てを二つ同定し記述する。第二に、WKが使ったデータは電話会話なので、対面会話の場合に表情や仕草といった非音声的な相互行為の資源がどう使われうかが明らかでない。本稿では電話会話に加えて対面会話のデータを使うことによって、この点を調べる。

## 3. 分析

### 3-1. データ

本稿で用いるのは電話会話（約119分）の録音データと対面会話（約660分）の録画データである<sup>3)</sup>。

### 3-2. ニュースの告知

断片1にもう少し前の文脈を付け加えて分析を始めてみよう。

### 【断片1 再掲】

- 01 涼子： でも>もう<<大概>ちょっとアレだな::  
 02 : と思っ[て::]あh(け)h(ど)hもお[いいやメッセージでも]ひとつでも残しとこう=  
 03 五月： [あん] [ちょっと残してみたんだ]  
 04 涼子： =>とか<[思って::]

- 05 五月 : [ほんつと::; どうも[どうも]あたしさ, <11>月と12月さ::,  
 06 涼子 : [う ん]  
 07 涼子 : う:ん.  
 08 五月 : 先輩といっしょに住むから.  
 09 →(0.7)

断片1は米国に在住する二人の日本人女性、五月と涼子の間の会話である。電話が始まってしばらく、二人はこの会話を収録することについて話していた。この話の流れで涼子が五月に留守番電話のメッセージを入れたことが話題になる(01-04行目)。ここで五月は「どうもどうも」と受けながら(05行目)、近い時期に(このデータの収録時期は9月もしくは10月である)「先輩」(女性であると思われる)と一緒に住む旨を涼子に伝える。09行目の0.7秒の沈黙は、この文脈に乗せられて生じている。まずは09行目が、どんな「位置」に置かれたものなのかを考えてみよう。05行目で五月は、「どうもどうも」と涼子を受け取りながら「あたしさ」と切り出すことによって、話題を変えている。この話題の変化は、会話の全域的構造(Schegloff & Sacks, 1973:冒頭, 本体, 終結部といった、会話という活動を構成する諸段階)の中のどこでも起こりうるものではない。彼女たちがこれ以前に話していたこと(会話収録について、留守番電話について)は、会話の「前置き」(用件や本題に入る前に話しておくべきこと)と聞かれうるものであった。だからこの「前置き」が終わりうる位置は、いくつかの特別な話題が置かれてよい場所である。たとえばこの位置では、電話の用件や、近況の報告が話題になってよい。その意味で五月の報告は、ただの情報伝達ではなく、「近況の報告」として聞いてよいものになる。そして「近況の報告」が出来事の報告の形をとったとき、その最初に来るものは、明らかに情報価値の高い、「ニュース」である。五月はこのニュースを、その前提となる情報を「あたしさ」「11月と12月さ::,」と区切って伝え、これに涼子から「う::ん」(07行目)と反応を得てから、発話順番の最後に詰め込んで伝えている(「先輩と一緒に住むから」)。このように、05・08行目のニュースが、話し手(五月)自身によって「驚くべき」ものとしてデザインされていることに注意しよう。言い換えればここで五月は、語り口を工夫してニュースの価値を釣り上げている。WKは「驚き」の連鎖において、驚きを示す反応のトークンがふつう「聞き手から驚きを引き出すように組み立てられたトーク(典型的にはニュースの語り、宣言、情報伝達)の後に生じる」(WK: 155)ことを指摘している。同様に、日本語会話においてもしばしば話し手によって「驚くべき」ものとして組み立てられたトークが観察される。

### 3-3. 可能な行為の記述

09行目の0.7秒の無音状態が、五月によって「驚くべき」ものとして組み立てられたニュースの後という位置で生じていることに再度注意を向けてみよう。この位置に置かれると、まずは09行目の無音状態が、涼子の側に属する振る舞いであることがわかる。言い換えればこの0.7秒の無音状態は、涼子の「沈黙」である。なぜ0.7秒の間誰も話していないのに、それが涼子の振る舞いであることがわかるのか。これは、ニュースの後には聞き手が反応すべきだという規範的關係があるからである。ではここで涼子は何を行っているのか。WK(p166)はこのような位置で生じた沈黙が、「驚いている」ことを示しうるものであると述べている。我われ日常生活者は、驚きが大きかった時に声を失うことがあることを、規範的に知っている。だから、「驚くべき」ものとして組み立てられたニュースとして認識可能な発話順番の後に生じた、ある程度の長さの無音状態は、本当に(つまり事実としての認知処理過程において)当人が驚いているかどうかとかわりなく、聞

き手が驚きのあまり声を失っている、つまり「絶句」しているものとして記述可能である。沈黙が「ある程度の長さ」のものであることに注意しよう。09行目の沈黙はそれ自体で振る舞いとして無であるわけではなく、0.7秒という「長さ」をもっている。これが0.1秒であったり、あるいは10分に渡るものだったらどうだろうか。前者は「大きな驚き」を示すものとして短すぎるだろうし、後者はそもそも「驚き」を表すものではなく、聞き手が何らかの理由で電話口からいなくなったり話せなくなったものとして理解されるだろう。短すぎず長すぎず、電話を聞きながらも反応できる機会に反応できないことがわかるような「長さ」だからこそ、09行目の沈黙は「絶句」という可能な行為として記述できる。

このようにして振る舞いの「位置」と「構成」を丹念に調べていくと、09行目の無音状態には「絶句」という可能な行為の記述を与えることができる。これが、社会成員としての相互行為の参加者が09行目でまさに直面している状況である。09行目の無音状態をどう理解するかということは、その意味で参加者自身にとっての実際の問題である。「絶句」という可能な行為に対して参加者がどう理解を示したのかは、09行目の次に生じたことをみることによって明らかになる。

### 3-4. 驚きを示す反応のトークン

#### 【断片1 再再掲】

08 五月： 先輩といっしょに住むから。

09 →(0.7)

10 涼子： ⇒はあ::？

11 (0.2)

12 五月： >だからく久美ちゃんがさ、<園子>んとこ行っちゃったんだよお。＝

09行目の0.7秒の沈黙に続いたのは、涼子の「はあ::？」という強調された驚きであった。これも、WKが英語会話について観察したこととある程度一致している。彼女たちは沈黙の後に、ニュースの聞き手による「驚きを示す反応のトークン」が置かれることを報告している（WK: 165）。このようなトークンを置くことによって、先の沈黙が「驚き」のために「絶句」していたものであったことが、週及的に確かめられる。WKはこの点には触れていないが、ニュースへの「驚きを示す反応のトークン」は、音調の強意（「はあ::？」）などのやり方で、強められて発される。「驚きを示す反応のトークン」を、社交辞令だとわかるように軽く発することも可能であることに注意しよう。そうではなくこの種のトークンを強調して発することによって、驚きの「大きさ」が「絶句」をもたらしたことが理解可能になる。加えて「はあ::？」というトークンは、驚き「だけ」を示すという特徴をもっている。つまり「はあ::？」と言うとき、涼子は信じられなさや驚きの大きさを示すだけで、それ以上のことを何も言っていない。このため五月にとっては、涼子がただ大きく驚くだけで言葉を失っていることが観察可能になる。

### 3-5. 「絶句」の組み立て

以上をまとめると、涼子の「絶句」は、次のような振る舞いの連鎖により組み立てられている。

#### ① 情報価値を釣り上げられたニュースの告知

- ② ある程度の長さの沈黙
- ③ 聞き手による、強調された、驚きを示す反応のトークン

この①～③の組み立てによって、「絶句」という行為は手続き的に産出され、参与者にとって記述可能になっている。言い換えると、「絶句」という行為は相互行為的に達成されており、けっして個人の認知処理過程がそのまま行為として写し取られたものではない。それどころか、この組み立てにしたがえば人は認知過程処理で実際に「絶句」することなく相互行為の中で適切に「絶句」することも可能だし、逆にもし認知処理過程で実際に「絶句」していたとしても、この（あるいは他の、まだ記述されていない）組み立て抜きに相互行為の中で行為として「絶句」することはできない。②の位置でニュースの語り手が何もしていないわけではなく、「待つ」ことをしていることに注意しよう。五月は涼子が黙っている0.7秒の間に情報を加えることも、次の話に進むこともできたはずである。五月がそれを差し控えているからこそ、涼子に「絶句」する機会が与えられる。

### 3-6. 繰り返し利用可能性

前節でみたような「組み立て」が「絶句」という行為の記述を生み出す社会的オブジェクト（社会成員が共有する、繰り返し利用可能なもの）であるなら、それは場面や文脈を超えて、少なくとも会話という活動の中で繰り返し使えるものでなければならない。別の断片をみてみよう。

#### 【断片2 電話会話】

- 01 真二： わくわくどきどきじゃんもう：毎に[ち  
 02 希美： [違うよ::<すっ>ごい辛いよ：  
 03 (.)  
 04 真二： なんでそれが：  
 05 希美：① 外に出ちゃ駄目なん d-出れないもん。(0.6)だ[か]ら(.)見かけても無視だよ？  
 06 真二： [(ai-)]  
 07 ② (0.5)  
 08 真二：③ ↑まじで。  
 09 希美： ほんとだって。

断片2では、希美（女性）が真二（男性）に、最近ボーイフレンドができたことを報告し、そのことにまつわる愚痴をこぼしている。希美にいわせると、ボーイフレンドの友人達と希美は違うコミュニティに属しているため、ボーイフレンドが友人達と一緒にいるところでは希美は冷たく扱われるらしい。希美はまず「わくわくどきどき」（01行目）という真二の見解を否定しながら自分の立場を「<すっ>ごい辛い」（02行目）と表現し、その例として外でボーイフレンドを「見かけても無視」（05行目）であることを挙げる。希美は真二が知らない事実を打ち明けており、かつこれは「<すっ>ごい辛い」性質をもつものである。そして恋愛関係にある者の間での「無視」は、ただならぬ事柄である。このため希美の報告は「驚くべき」ものとして組み立てられているといえる（①価値を釣り上げられたニュースの告知）。真二はこれに対して0.5秒間を空け（07行目）②ある程度の長さの沈黙、08行目で「↑まじで」と高いピッチで驚いた後に何も付け足さない（③聞

き手による、強調された、驚きを示す反応のトークン)。

次の断片3は断片1の続きだが、ここまでの二つの事例と多少異なる形でやり取りが進む。

【断片3 電話会話】

- 12 五月 : >だから<久美ちゃんがさ、<園子>んところ行っちゃったんだよもお。=  
 13 涼子 : =あ:::やっぱり::  
 14 五月 : う::ん  
 15 (0.2)  
 16 涼子 : あ:::(ん)あ[::,  
 17 五月 : [<だから>,. hhhhhhhhhh あっ-いまはまた別の人が住んでんのね: ?  
 18 涼子 : [あん  
 19 五月 : [あそこに::  
 20 五月 : ① .hhh で. hh んとルーシーが、(0.2)ドイツに行ってるのよいま。  
 21 ② (0.6)  
 22 涼子 : ③ [へ↑え:::っ((声がかすれ気味))  
 23 五月 : [フォーティセカンドストリートで。  
 24 (0.3)  
 25 涼子 : すごいじゃ::ん  
 26 五月 : そうそれで、(.)↑ちょっと(.)だけ帰ってくんだけど::. hhh

20行目で五月は「ルーシー」が「ドイツに行って」いることを報告する。この報告に対し21行目で0.6秒の間が開き、その後22行目で涼子は「へ↑え:::っ」と、さも感心したように声をうわずらせて驚く。この部分だけをみると①~③の組み立てに沿っているようだが、注意深くやり取りを検討すると、いくつかの点でこれまでの断片との違いをみつけることができる。まず21行目の沈黙の後に、情報をもたらした五月が涼子の反応(22行目)に重ねて「フォーティセカンドストリートで。」(23行目)と説明を加えている。これまでの事例ではニュースの提供者は聞き手が「驚きを示す反応のトークン」を発するまで待っていたが、この断片で五月はそうしていない。言い換えれば、「驚きを示す反応のトークン」が先立つ沈黙の意味を「絶句」に確定する作業を行っていると考えた時に、この断片で五月はその作業を不要なものみなしている。なぜ五月はこのような態度をとるのだろうか。最初のニュースの告知(20行目)に戻ってみよう。五月は確かに「ルーシー」が「ドイツに行って」いるというニュースを伝えており、これに涼子が驚くわけだが、これまでの断片と異なり五月はこのニュースを、とりたてて「驚くべき」ものとしては組み立てていないようにみえる。そもそもこの話は、「先輩と一緒に住む」(断片1)というニュースの一部分を構成している。五月は「先輩と一緒に住む」ことになった経緯を話し始める(12行目)が、この説明がまだ終わっていないことがわかる位置で、説明の一部分として、「で」で接続しながら「ルーシー」にかんするニュースを差し出している。これまでの断片で「驚くべき」ものとして「組み立てられた」ニュースという記述を行ってきたのは、この例が示すように、すべての「ニュースを伝える」という活動が、とりたてて「驚き」を引き出すように組み立てられるわけではないからである。むしろある種のニュースにたいしては、たんにその情報を受け取ったことを示すだけで、反応として事足りることがある。この断片で、この位置に置かれたニュースを「驚くべき」ものにするために

は、ニュースの情報価値を釣り上げるようにその構成を工夫する(たとえば語気の強調、五月自身による見解の付与など)必要があるはずだが、五月はそうしていない。このようにニュース自体を「驚くべきもの」として組み立てていないからこそ、五月はわざわざ涼子の驚きの反応を待つことなく話を続けているのである。だがここで一つ生じる問題は、話し手がニュースを「驚くべき」ものとして組み立てなかったとしても、聞き手がそれに大きな情報価値を認めることはありうるということである。言い換えるなら、話し手が「驚くべき」ものとしてデザインしなかったニュースにたいして「絶句」することはいかにして可能か、という問題にここで涼子は直面している。これに対する一つの解決法は、聞き手の側からニュースの情報価値を釣り上げるというものである。22-23行目で自分の強調された「驚きを示す反応のトークン」が五月の発話と重複したのをみた涼子は、25行目で「すごいじゃ::ん」と、強調した言い方でニュースに「すごい」という情報価値を自ら与えている。こうすることによって涼子は聞き手の側からニュースを「驚くべきもの」として位置づけ直し(①を遡及的に作り出し)、生じた沈黙に「絶句」としての認識可能性を与えている。

以上のように断片3は通常の「組み立て」から外れた例外ケース(Schegloff, 1968)といえるが、あくまで参加者は①~③の「組み立て」に規範的に志向した形で振る舞って「絶句」の理解可能性を生み出していることがわかる。

### 3-7. 対面会話における組み立て

ここまでは電話会話の例をみてきたが、次に表情や身振りといった非音声的な資源が使える対面会話の例を調べる。

#### 【断片4 対面会話】

- 01 鹿島 : 男子よりも>けっこうくたか(h)いと思うねんけど  
 02 (0.2)  
 03 中山 : u haha [.hh]  
 04 左近 : [男ちっちゃい子が多いかな=  
 05 高田 : ① =山田ひゃくごじゅうななや  
 06 ② (0.5)  
 07 鹿島 : ③ [え?] ((目を見開き、驚いた表情で少し身を乗り出す))  
 08 左近 : ③ [え?]=  
 09 中山 : ③ =え? ((瞳孔を一瞬大きくする))  
 10 (0.2)  
 11 鹿島 : ↑うそ:::=  
 12 左近 : =ひゃくろくじゅうはあるでしょ.彼は((テーブルを叩く))

この断片4では同じサークルに所属する大学生四名(鹿島, 中山, 左近が女性。高田のみ男性)が、サークルの仲間の身長を話題にしている。左近が04行目で「男」には「ちっちゃい子が多い」と述べると、それを受けてこの場で唯一の男性である高田(彼自身は比較的長身)が「山田ひゃくごじゅうななや」(05行目)。「山田」はサークルの男性メンバーの一人だと思われる)と言う。ここで高田は04行目の左近の「ちっちゃい子が多いかな」という発話に密着させる形で「山田」の身長を伝えている。つまり「山田」の身長は、「ちっちゃ

い子」の例としてすぐに思い出すことのできる、第一に挙がるような性質の情報であるものとしてデザインされている。そして157cmという身長は、大学生男子の身長としてはかなり平均より低いことが明らかなのである。この意味で「山田ひゃくごじゅうななや」も、「驚くべき」情報として認識可能なものである(①)。続いて0.5秒の間が生じ(②)、ここでは聞き手の三者がみな一様に「え?」と驚く(07-09行目)。といっても、同じ間投詞を使っているが、三者はそれぞれ違った資源の使い方で、驚きを強調している。まず鹿島は目を大きく見開き、口を開けて身を少し高田の方に乗り出しながら「え?」と驚く(07行目)。同じ瞬間に左近は、カメラの死角になって表情は見えないものの、他の二者より強い語気で「え?」と驚く(08行目)。これにわずかに遅れて中山は、一瞬瞳孔を大きく開いて「え?」と驚く(09行目)。対面会話においてはこのように、表情や姿勢などの非音声的資源を用いて驚きを強調することができる。この点は電話会話と対面会話の違いとして挙げられよう。だがこの違いは、あくまで③を構成するために仕える資源が異なることを意味するだけであって、①~③の組み立て方自体に差異をもたらすものではない。

断片4では電話会話と対面会話の違いによって「絶句」の組み立て方自体にかわるころはなかったが、次の断片5では少々異なったことが生じている。

#### 【断片5 対面会話】

- 01 小田 : .h[h]  
 02 瀬古 : [うん:  
 03 (3.0) ((小田は下を向いて自分の鞆に手を突っ込んでいる))  
 04 瀬古 : ①' あたし社会福祉士の課程とんのやめるわ。  
 05 ②' (0.4) ((小田が素早く顔を上げ、驚愕の表情で瀬古を見る))  
 06 中林 : え?  
 07 (0.6)  
 08 瀬古 : え? ((微笑みながら))  
 09 (0.2)  
 10 小田 : なんで?:  
 11 (0.2)  
 12 瀬古 : いえー ((ピースサイン))  
 13 (.)  
 14 中林 : なんでなんで:.  
 15 瀬古 : え:もしんど(h)い(h). hu[h]  
 16 小田 : [え, え, え?

この断片は三人の大学生の会話からとられたものである。ここでは04行目で瀬古が、中林と小田に、「社会福祉士の課程とんのやめるわ」と宣言している。中林と小田は社会福祉士課程の受講生ではないが、両者とも瀬古とは比較的親しい間柄であり、瀬古が社会福祉士課程の受講生であることを知っている。瀬古は先行する話題が終わる(01-03行目)タイミングをみて、中林と小田の二人にニュースをもたらしている。電話会話と対面会話の違いが表れるのは、このニュースに続く沈黙の間である。ここでは0.4秒の間が生じているが、下を向いて鞆の中を調べていた小田が、この間に勢いよく顔を上げ、目を見開いて驚愕の表情を作る<sup>4)</sup>。つ

まり「絶句」する中で小田は身体的に驚きを表している<sup>5)</sup>。このとき、瀬古の言うことが聞こえなかったのも理解できなかったのでもなく、小田が驚きのあまり声が出なくなっていることは、小田の振る舞いのうちに確認できる。それゆえ小田は、①～③のうち③を省くという選択をとることができる。実際小田は中林が「え？」(06行目)と驚いてもそれに追従せず、語り手の瀬古が茶化すように「え？」(08行目)と言ってもそれにも反応せず、10行目に至ってやっと「なんで: : ?」と驚きつつ理由を尋ねている。つまりこの断片で小田は、次の①' ②'の組み立てで「絶句」することができている。

- ①' 情報価値を釣り上げられたニュースの告知
- ②' 身体的な驚きの表出を伴った、ある程度の長さの沈黙

このように、やり取りがどういった状況で行われるかが、行為の理解可能性を生み出す組み立ての差異に反映される場合がある。

### 3-8. 他のパターン

ある行為の組み立て方は一つに限定されない。すでに前節で対面会話での組み立て方が電話会話と異なることをみたが、さらにデータを調べると、これまで同定してきたものとは別種のパターンが浮かび上がる。英語と日本語の違いなのか、それとも彼女たちが「驚きを示す反応のトークン」のはたらしめに照準を定めていて行為の記述とは切り口が違ったからなのかはわからないが、WKにはもう一つのパターンにかんする記述がない。

第一のパターンではニュースにたいしてまず沈黙が生じていたが、聞き手がニュースを受け取った後に次の言葉を継げない場合もまた、「絶句」しているものとして認識されうるだろう。

#### 【断片6 電話会話】

- 01 希美 : .hhh どうやって行った↑の: . =  
 02 真二 : (1) = 車友達んちの. [(.) [お-ぐ(お:るm/俺も)車]買った(.). p. h[h(hh) [う]ん.  
 03 希美 : (2) [ p [ い い な あ : . ] [ええ? . h[h]  
 04 (3) (0.5)  
 05 希美 : (4) ° う-° 嘘:何:じ.  
 06 (0.4)  
 07 真二 : 買った買ったう(れ/え)しい.

この断片では02行目で真二が車を買ったことを報告している。この報告に対して希美はこれまでの事例と異なつてすぐに「ええ？」(03行目)と大きく驚いている。ここで希美が驚くだけではなく話し続けたなら、「絶句」しているという記述はできないだろう。だが希美は強調された「驚きを示す反応のトークン」を、それ単体で用いて、0.5秒の間を空ける(04行目)。こうすることにより、驚きのあまり言葉を継ぐことができないという希美の行為の可能な記述ができるようになる。こちらの場合、ニュースの受け手が驚いていることは、沈黙に先立って観察可能になっている。続いて希美は0.5秒の沈黙の後の05行目で「° う-° 嘘:」と、情報の価値を認めながら再び驚いてみせている。こうすることにより、04行目が「大きく驚いているために言

葉を継ぐことができない」という行為を行っていたものとして確かめられることになる。

次の断片7は対面会話からとられたものである。

【断片7 対面会話】

- 01 難波： テレビある？  
 02 (0.3)  
 03 遠藤： テレビあるよ  
 04 (.)  
 05 難波： 家に  
 06 (0.2)  
 07 遠藤： ° うん°  
 08 難波：(1) ないねやんおれ。  
 09 遠藤：(2) え::っ ((笑みを作り，口を大きく開ける))  
 10 (3) (0.4) ((遠藤は笑顔のまま))  
 11 遠藤： やばくない>なん[かくそれってなん]か寂しくないなんか。  
 12 難波： [ん：ないねん]

ここでは難波が遠藤に，自分の下宿先にテレビがないことを伝えている（08行目）。この情報を伝えるにあたって，難波は予め遠藤の下宿先にはテレビがあるかどうかを尋ね（01-07行目），これにより同じ下宿生である自分の下宿先にテレビが「ない」という情報との差異を際立たせ，「テレビがない」という情報の価値を釣り上げている。このニュースにたいして，先の断片7と同様に聞き手である遠藤は「え::っ」（09行目）と，音の強さと引き延ばしの二点で強調された間投詞を用いて大きな驚きを示し，それに続いて0.4秒の沈黙が生じる（10行目）。ここでも，沈黙に先立って受け手がニュースに大きく驚いていることが明らかになっている。断片7との違いは，これが対面会話であることである。「驚きを示す反応のトークン」に沈黙が先行したケースにおける，電話会話と対面会話との違いがこのパターンでも同様に観察できる。3-7節でみたように，対面会話の場合受け手は視覚的な資源を用いて驚きを示すことができた。この断片7でも遠藤は，「え::っ」と驚きながら口を大きく開け，笑みを作って，表情を使って驚きを示している。そしてこの表情は，続く0.4秒の沈黙の間も保たれる。遠藤は沈黙後の11行目で「やばくない」と言い難波の情報の「驚くべき」性質を認めるが，これが情報の価値を認めつつも，断片6の「° う° 嘘:」（05行目）のような「驚きを示す反応のトークン」ではなく，命題内容をもつような発話であることに注意しよう。つまり，沈黙自体において「驚き」が示されているために，断片7では「驚きを示す反応のトークン」を使って再び驚いてみせる必要がない。受け手による沈黙後の振る舞いの違いは，やはりこちらのパターンでも，発語以外の資源を用いて沈黙自体において「驚き」が示されているかどうかによって生み出されている。この違いがありつつも，断片6の「° う° 嘘:何:;」と断片7の「やばくない>なんか<それってなんか寂しくないなんか。」はどちらもニュースの情報価値を認めており，そしてその組み立てにおいて非流暢性がみられる。断片6では「嘘」の「う」がカットオフ（声門閉鎖。具体的には音が途切れて聞こえること）され，断片7では「なんか」という談話標識が三度も用いられている。このような非流暢性は，発語の組み立てに話し手が困難をもっていることを示す。いま，ニュースの聞き手が「大きく驚いているために言葉を継ぐことができない」状態にあるなら，そこ

から抜け出す際に発語の組み立てにてこずることは合理的であろう。

#### 4. おわりに

本稿では認知の「社会」性をあらわす例の一つとして、語り手によって情報価値を釣り上げられたニュースに驚きのあまり「絶句」という行為の理解可能性の組み立て方を、会話分析により記述した。「絶句」の理解可能性は、A)ある情報に驚きすぎて言葉がでない場合 B)ある情報にいったん言語的手段で驚いた後、驚きすぎて言葉が継げない場合の二通りについて、それぞれ次の組み立て方で生み出される。

A) ある情報に驚きすぎて言葉がでない場合

- ① 情報価値が釣り上げられたニュースの告知
- ② ある程度の長さの沈黙
- ③ 聞き手による、強調された、驚きを示す反応のトークン

B) ある情報に驚いた後、驚きすぎて言葉が継げない場合

- (1) 情報価値が釣り上げられたニュースの告知
- (2) 聞き手による、強調された、驚きを示す反応のトークン
- (3) ある程度の長さの沈黙
- (4) 聞き手による驚きを示す反応のトークン

やり取りに視覚的資源が使えるかどうか（電話会話か対面会話か）がA)とB)の組み立てに影響を及ぼす。対面会話において沈黙（A)の②とB)の(3)）の間に視覚的に聞き手の驚きが表されていると、沈黙の意味を後から確かめるための振る舞い（A)の③とB)の(4)）が省略される。

このように本稿では、英語会話を対象に行われたWKの知見を日本語会話で確かめながら、同時に彼女たちが言及しなかったパターンを同定し、また身体的な振る舞いがこの組み立てにどうかかわるかを示した。

会話分析の利点は相互行為の参加者が社会生活を捉えているその仕方を再現し、行為の理解可能性を記述できる点にある。振る舞いの「位置」を調べるとき、調査者は行為者が直面している状況に自らの身を投げ込み、続けてその振る舞いの「構成」を調べることによって、それが行っている行為に可能な記述を与える。この「可能な記述」にたいする参加者の理解の仕方を調べることで、データコレクションを検討して「可能な記述」の組み立てが繰り返し利用可能であることを確認すること、規則から外れた例外ケースにおいて参加者がこれまで明らかにしてきた組み立ての規則にどう志向しているかをみることで、これらの方法は分析の結果与えられた知見の正しさを保証する手続きとなる。

本稿でみた「絶句」という行為は、沈黙にたいして与えられる記述である。言い換えれば「絶句」は、少なくとも電話会話の場合、通常の間人行為の研究（たとえば言語行為論や社会学の行為理論）が取り扱わないような、なにも表さないという状態の行為としての記述になっている。人は当然一日の大部分を黙って過ごすわけだが、べつに彼／彼女たちは一日中「絶句」し続けているわけではない。その中のごく短い時間を何かが一適切な反応が「ない」状態として理解することができるのは行為連鎖の社会規範が振る舞いに及ぼす制約によるものだし、この反応が「ない」状態を「絶句」という行為を行っているものとして理解可能にする

ためには、本稿で記述したような組み立ての利用が必要になる。本稿で行った分析は、直接観察できない個人内の事象と捉えられがちな認知的事象の、容易に観察可能な（＝社会的な）行為としての理解可能性の組み立て方を形式的に記述するものであった。

## 注

- 1) 認知の「社会」性というテーマと関連した筆者の代表的な研究成果としては、本稿の他に、他者の態度を理解すること（平本, 2011a）、ユーモアを生み出すこと（平本, 2011b）、想像を表現すること（平本・高梨, 2015: 近刊）などがある。
- 2) 以下に本稿で用いる記号一覧を記す。
 

[	重複（言葉の重なり）の開始
]	重複（言葉の重なり）の終了
=	イコール記号で繋いだ部分が間隙なく発されていることを表す。
(.)	コンマ一秒前後の短い沈黙を表す。
(数字)	沈黙を表す。括弧内の数字はコンマ一秒単位での沈黙の長さである。
:	直前の音の引き延ばし。その個数により相対的な引き延ばしの長さが表現される。
-	直前の音が中断されていることを表す。
.	直前の部分が下降調で発されていることを表す。
,	直前の部分が継続を示す抑揚で発されていることを表す。
?	直前の部分が強い上昇調で発されていることを表す。
∩	直前の部分が中程度の上昇調で発されていることを表す。
° 文字°	囲まれた文字が相対的に弱い音調で発されていることを表す。
文字	下線を引いた文字が相対的に強い音調で発されていることを表す。
hh	hは呼気音を、hの個数はその相対的な長さを表す。
.hh	ドットに続くhは吸気音を、hの個数はその相対的な長さを表す。
文字(h)	文字が呼気音とともに発されていることを表す。
>文字<	囲まれた文字が相対的に速く発されていることを表す。
<文字>	囲まれた文字が相対的に遅く（ゆっくりと）発されていることを表す。
(文字)	丸括弧内の文字の聞き取りに自信が持てない場合の表記。
(・)	丸括弧内の部分が聞き取れない場合の表記。点の多さが相対的な長さを表す。
- 3) 電話会話のデータは一般公開されている「The TalkBank Project」(MacWhinney, 2007) 内の「Callfriend Japanese Corpus」から、「Japn1684.mp3」「Japn1773.mp3」「Japn1841.mp3」「Japn2167.mp3」「Japn4222.mp3」を使用している。対面会話のデータは筆者が収集した、大学生同士の日常会話のデータである。いずれのデータも、すべて学術目的の使用許可を得たものである。
- 4) カメラの角度の問題で中林の表情はわからない。小田に少し遅れて中林の顎も上がったように見えるが、表情が見えないためにこれが驚いてのものなのかどうかは判別できない。
- 5) これと異なり断片4では、「絶句」中に聞き手の鹿島と中山は表情を変えなかった（左近はビデオカメラの配置上確認できない）。

## 文献

Austin, J., 1962, How to Do Things with Words, Oxford University Press. (= 坂本百大訳, 1978, 『言語行為論』大修館書店.)

- Goffman, Erving, 1955, "On Face-work: An Analysis of Ritual Elements of Social Interaction", *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, 18(3): 213-231.
- Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Garden City, NY: Doubleday.
- 平本毅 (2011a). 「他者を「わかる」やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62(2), 153-171.
- 平本毅 (2011b). 「「フリ」による「オチ」の投射：会話分析によるアプローチ」『フォーラム現代社会学』(10), 148-160.
- 平本毅 (2015). 「会話分析の「トピック」としてのゴフマン社会学」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン：やりとりの秩序の社会学』新曜社, 104-129.
- 平本毅・高梨克也 (2015). 「社会的活動としての想像の共有：科学館新規展示物設計打ち合わせ場面における「振り向き」動作の会話分析」『社会学評論』66(1), 39-56.
- 平本毅・高梨克也 (近刊). 「環境を作り出す身振り：科学館新規展示物制作チームの活動の事例から」『認知科学』22(4).
- Jefferson, Gail, 2004, "Glossary of Transcript Symbols with an Introduction", In Gene H. Lerner., (ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, Amsterdam/Philadelphia: 13-23.
- MacWhinney, Brian, 2007, "The TalkBank Project", In Joan C. Beal, Karen P. Corrigan, and Hermann L. Moisl., (eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases, Vol.1*, Houndmills: Palgrave-Macmillan: 163-180.
- Pomerantz, Anita M, 1980, "Telling My Side: 'Limited Access' as a 'Fishing Device'", *Sociological Inquiry*, 50: 186-198.
- Sacks, Harvey, 1963, "Sociological Description", *Berkeley Journal of Sociology*, 8: 1-16. (南保輔・海老田大五朗訳, 2013, 「社会学的記述」『コミュニケーション紀要』24: 81-92.)
- Schegloff, Emanuel A, 1968, "Sequencing in Conversational Openings", *American Anthropologist*, 70(4): 1075-95.
- Schegloff, Emanuel A, 1996, "Confirming Allusions: Toward an Empirical Account of Action", *American Journal of Sociology*, 104: 161-216.
- Schegloff, Emanuel A and Harvey Sacks, 1973, "Opening up Closings", *Semiotica*, 8: 289-327.
- Wilkinson, Sue and Kitinger, Celia, 2006, "Surprise as an Interactional Achievement: Reaction Tokens in Conversation", *Social Psychology Quarterly*, 69: 150-182.

## Conversation Analysis of one who is “at a loss for words”

HIRAMOTO Takeshi<sup>i</sup>

**Abstract** : The aim of this study is to discuss social aspects of cognitive events. In order to present one example of social aspects of cognitive events, we examine how participants in talk-in-interaction can exhibit their surprise about news which another person has conveyed to them. In particular, this paper focus on how a participant shows that he/she is “at a loss for words” when he/she acknowledges such news. Since participants in talk-in-interaction can understand that the other person is “at a loss for words” when they are in dialog with a person who is surprised during a mundane conversation, we can identify the participant’s method of constructing a recognizability of cognitive status that a person is “at a loss for words” when we examine details of their conversational interaction. Clearly enough, this method is one example of the object that is concerned with social aspects of cognitive events. Conversation analysis is used to investigate naturally-occurring face-to-face and telephone conversational data. Through the detailed examination of conversational data, we identify the method used to construct a recognizability of cognitive status that a person is “at a loss for words”, and reveal that typically it consists of three sequential elements: some surprising news conveyed by a teller, a mid-length pause, and emphasized expression of surprise by the recipient. Furthermore, the result of the comparative analysis of face-to-face and telephone conversation shows difference between these two settings in terms of the composition of the method used to construct a recognizability of cognitive status that a person is “at a loss for words.”

**Keywords** : conversation analysis, description of action, one is “at a loss for words,” sociality of cognition

---

<sup>i</sup> Graduate School of Management, Kyoto University, Research Assistant Professor